

黒々と連なる祖母山系。

眼下に沈むひそかな町。その山の端の向こうの空が、淡い朱から次第に燃える赤に染まっていく。「まだか」。

「まだか」。「もう少しか」

その時、「来た！」。地球をこじ開けるように山の端の一点から強烈な光が…。

黄金色の光の束は見る者を射抜き、周りのすべてが消滅する。「あー、御来光だ」。神々しさに至福を感じる。

やがて圧倒的な黄金の光も、地球の自転の速さを証明しながら、見る見るいつ

ポインセチア



聖歌を聞くころ

もの穏やかな太陽に変わっていった。そして国見ヶ丘から、百人ほどの団体客がさーっといなくなった。

晩秋、娘と二人高千穂へ、バスを乗り継ぐのんびり旅。のはずが、絶景の高千穂峡や夜神楽にも次々と団体さんが。私たちは避けるように急いだりずらしたり。

かくいう私も利用したことがある。手軽で便利。貪欲どん欲にいい所だけを効率よく回るツアー。車のない人や、高齢者にびったり。今や、世界のあらゆる秘境にツアーの手が伸びる。

どうして日本人は旅好きなのか。好奇心と解放感。だが本質には、芭蕉ばしょうに通じる無常観、時の移ろいを感じる心がある。

「…行かふ年も又旅人也」

ゆき

また

なり

(た)